

10th World Congress of the International Hepato-Pancreato-Biliary Association (IHPBA) (2)



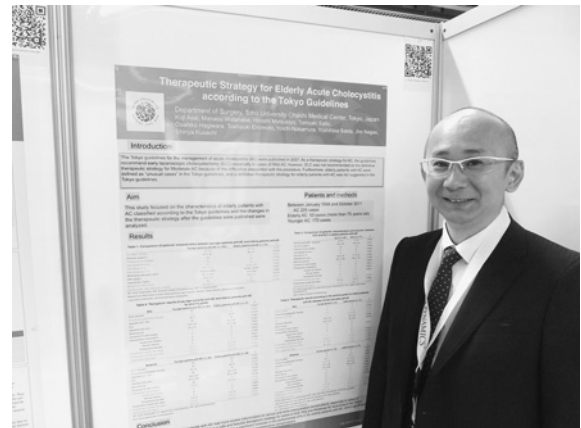
浅井 浩司

東邦大学医学部外科学講座一般・消化器外科学分野 (大橋)

今回、10th World Congress of the International Hepato-Pancreato-Biliary Association (IHPBA) で発表する機会を得たので報告する。IHPBA は1年おきに開催される国際的な肝胆膵外科系学会である。2012年はフランスのパリで7月1~5日まで開催された。世界中で行われている肝胆膵外科系学会のなかでも最も大規模な学会で、今年は3000人を超える参加があり、日本からも200人を超える参加者が集まった。大森病院からは金子教授をはじめ多くの医局の先生方が参加し、大橋病院からは私と現在ロンドンに留学中の松清の2人で参加した。

われわれは初日に行われた postgraduate course から参加をした。今回の postgraduate course の主題は「Laparoscopic surgery for HPB」であった。朝から夕方まで全世界の著名な腹腔鏡手術の specialist が発表され、活発な討論が行われた。論文で名前をよく見たことのある著名な先生方が目の前で発表され、手術ビデオが供覧され非常に勉強になった。腹腔鏡手術でも個々に、さまざまな考え方があることを学んだ。大橋病院では肝胆膵領域の腹腔鏡手術はまだ十分な症例数を経験しているとは言えないが、今回の発表を聞いて、世界の流れは開腹手術から腹腔鏡手術へと移行していることを改めて痛感させられた。2日目以降は一般演題の発表が行われていたが、いずれの会場でも立ち見ができるほど盛況であった。

今回の私の発表はポスターセッションで、「Therapeutic strategy for elderly acute cholecystitis according to the Tokyo Guidelines」のタイトルで発表した。現在、急性胆嚢炎に関する診療ガイドラインは国内版(科学的根拠に基づく急性胆管炎・胆嚢炎の診療ガイドライン, 2005)と国際版(Tokyo Guidelines for management of acute cholangitis and cholecystitis, 2006)と2つ存在するが、両者とも



筆者ポスター発表の様子



オルサー美術館での Gala Dinner

急性胆嚢炎に対しては早期の腹腔鏡手術が推奨されている。特に国際版は「Tokyo Guidelines」という名称で、そ

の名の通り日本から発信された急性胆道炎に関する国際基準である。われわれはガイドライン発刊前より積極的に早期手術を行っており、今回の発表の趣旨は、75歳以上の高齢者といえども全身麻酔が安全にかけられる全身状態であれば、積極的な早期腹腔鏡手術を行うべきと結論付けた内容である。日本を含め、全世界において十分に浸透しているとは言い難いこの治療戦略であるが、今後も発表を繰り返し行っていくことにより、早期腹腔鏡手術という治療戦略が普及し、「Tokyo Guidelines」の認知度が高くなることを期待する。

学会において驚く点としては3日目の夜に行われた

「Gala Dinner」なる懇親会が、オルセー美術館を貸し切られて行われたことであった。通常の営業時間後に学会員のみが入場を許可された。私自身は美術に関しては疎い方だが、ゴッホなどの有名な作品を自由に、好きなだけ鑑賞できるという学会のスケールの大きさに驚いた。

このように国内学会では経験できないようなIHPBA 2012参加記であるが、その他に日本ではあまり見ないようなaggressiveな開腹手術、興味深い腹腔鏡手術の報告もあり、世界の肝胆膵外科手術の流れを直接肌で感じることができた。自分自身を奮起させる貴重な経験をした国際学会の参加であり、今後も継続的に参加したいと思っている。